
太宰治全集

3

筑摩全集類聚

筑摩書房

太宰治全集第三卷

昭和四十六年五月五月初版第一刷発行

著者 太 宰 治

発行者 竹之内 静雄
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 東京 (281) 七六五一(代表)
振替 東京 四 一 二 三

印刷 三晃印刷株式会社
製本 大口製本印刷株式会社

(分類) 0393 (製品) 71903 (出版社) 4604

第三卷
目次

八十八夜
 美少女
 畜犬談
 おしやれ童子
 皮膚と心
 俗天使
 鷗
 兄たち
 春の盜賊
 駈込み訴へ
 老^{アルト}ハイデルベルヒ
 善藏を思ふ
 誰も知らぬ

一五
 一四
 一三
 一四
 二〇
 一〇
 八
 七
 五
 盟
 元
 二
 三

走れメロス

古典風

女の決闘

乞食學生

短篇集

ア、秋

女人訓戒

座興に非ず

デカダン抗議

一燈

失敗園

リイズ

後記

二〇三

二六

二三

二八

三二

三三

三五

四〇

四三

四八

五三

五八

六三

太宰治全集
第三卷

八十八夜

諦めよ、わが心、獸の眠りを眠れかし。(C・B)

笠井一さんは、作家である。ひどく貧乏である。このごろ、ずるぶん努力して、通俗小説を書いてゐる。けれども、ちつとも、ゆたかにならない。くるしい。もがきあがいて、そのうちに、呆けてしまつた。いまは、何も、わからない。いや、笠井さんの場合、何もわからないと、さう言つてしまつても、ウソなのである。ひとつ、わかつてゐる。一寸さきは闇だといふことだけが、わかつてゐる。あとは、もう、何もわからない。ふつと氣がついたら、そのやうな五里霧中の、山なのか、野原なのか、街頭なのか、それさへ何もわからない、ただ身のまはりに不愉快な殺氣だけがひしひしと感じられ、とにかく、これは進まなければならぬ。一寸さきだけは、わかつてゐる。油斷なく、そろつと進む、けれども何もわからない。負けずに、つづつて、また一寸そろつと進む。何もわからない。恐怖を追ひ拂ひ追ひ拂ひ、無理に、荒んだ身振りで、また一寸、ここは、いつたいどこだらう、なんの物音もない。そのやうな、無限に靜寂な、眞暗闇に、笠井さんは、ゐた。

進まなければならぬ。何もわかつてゐなくても絶えず、一寸でも、五分でも、身を動かして、進ま

なければならぬ。腕をこまぬいて頭を垂れ、ぼんやり佇んでゐようものなら、——一瞬間でも、懷疑と倦怠に身を任せようものなら、——たちまち玄翁で頭をぐわんとやられて、周囲の殺氣は一時に押し寄せ、笠井さんのからだは、みるみる蜂の巢になるだらう。笠井さんには、さう思はれて仕方がない。それゆゑ、笠井さんは油斷をせず、つづばつて、そろ、そろ、一寸づつ眞の闇の中を、油汗流して進むのである。十日、三月、一年、二年、ただ、そのやうにして笠井さんは進んだ。まつくら闇に生きてゐた。進まなければならぬ。死ぬのが、いやなら進まなければならぬ。ナンセンスに似てゐた。笠井さんも、流石に、もう、いやになつた。八方ふさがり、と言つてしまふと、これもウツなのである。進める。生きてをれる。眞暗闇でも、一寸さきだけは、見えてゐる。一寸だけ、進む。危険はない。一寸づつ進んでゐるぶんには、間違ひないのだ。これは、絶対に確實のやうに思はれる。けれども、——どうにも、この相も變らぬ、無際限の暗黒一色の風景は、どうしたことか。絶対に、嗟あはれ、ちりほどの變化も無い。光は勿論、嵐さへ、無い。笠井さんは、闇の中で、手さぐり手さぐり、一寸づつ、いも蟲の如く進んでゐるうちに、靜かに狂氣を意識した。これは、ならぬ。これは、ひよつとしたら、斷頭臺への一本道なのではあるまいか。かうして、ぢりぢり進んでいつて、ゐるうちに、いつとはなしに自滅する酸鼻の谷なのではあるまいか。ああ、聲あげて叫ばうか。けれども、むざんのことには、笠井さん、あまりの久しい卑屈に依り、自身の言葉を忘れてしまつた。叫びの聲が、出ないのである。走つてみようか。殺されたつて、いい。人は、なぜ生きてゐなければ、ならないのか。そんな素朴の命題も、ふいと思ひ出されて、いまは、この闇の中の一寸歩きに、ほとほと根も盡き果て、五月のはじめ、あり金さらつて、旅に出た。この脱走が、間違つてゐたら、殺してくれ。殺されても、私は、微笑んでゐるだらう。いま、ここで忍従の鎖を斷ち切り、それがために、どんな悲惨の地獄に落ちて、私は後悔しないだらう。だめなのだ。も

う、これ以上、私は自身を卑屈にできない。自由！

さうして、笠井さんは、旅に出た。

なぜ、信州を選んだのか。他に、知らないからである。信州にひとり、湯河原にひとり、笠井さんの知つてゐる女が、ゐた。知つてゐる、と言つても、寢たのではない。名前を知つてゐるだけなのである。いづれも宿舎の女中さんである。さうして信州のひとつも、伊豆のひとつも、つましく氣がきいて、口下手の笠井さんには、何かと有難いことが多かつた。湯河原には、もう三年も行かない。いまでは、あのひとつも、あの宿屋にゐないかも知れない。あのひとつが、ゐなかつたら、なんにもならない。信州、上諏訪の温泉には、去年の秋も、下手くその仕事をまとめるために、行つて、五、六日お世話になつた。きつと、まだ、あの宿で働いてゐるにちがひない。

めちなやなことをしたい。思ひ切つて、めちなやなことを、やつてみたい。私にだつて、まだまだロマンチズムは、残つて在る筈だ。笠井さんは、ことし三十五歳である。けれども髪の毛も薄く、齒も缺けて、どうしても四十歳以上のひとつのやうに見える。妻と子のために、また多少は、俗世間への見榮のために、何もわからぬながら、ただ懸命に書いて、お金をもらつて、いつとは無しに老けてしまつた。笠井さんは、行ひ正しい紳士である、と作家仲間が、決定してゐた。事實、笠井さんは、良い夫、良い父である。生來の臆病と、過度の責任感の強さが、笠井さんに、いはば良人の貞操をも固く守らせてゐた。口下手ではあり、行動は極めて鈍重だし、そこは笠井さんも、あきらめてゐた。けれども、いま、おのれの芋蟲に、うんじ果て、爆發して旅に出て、なかなか、めちなやな決意をしてゐた。何か光を。

下諏訪まで、切符を買つた。家を出て、まっすぐに上諏訪へ行き、わきめも振らずあの宿へ駈け込み、さうして、いきせき切つて、あのひとつ、ゐますか、あのひとつ、ゐますか、と騒ぎたてる、そ

んな形になるのが、いやなので、わざと上諏訪から一つさきの下諏訪まで、切符を買った。笠井さんは、下諏訪には、まだいちども行つたことがない。けれども、そこで降りてみて、いいやうだつたら、そこで一泊して、それから多少、紆餘曲折して、上諏訪のあの宿へ行かう、といふ、きざな、あさはかな氣取りである。含羞でもあつた。

汽車に乗る。野も、畑も、緑の色が、うれきつたバナナのやうな酸い匂ひさへ感ぜられて、いちめに春が爛熟してゐて、きたならしく、青みどろ、どろどろ溶けて氾濫してゐた。いつたいに、この季節には、べとべと、噎せるほどの體臭がある。

汽車の中の笠井さんは、へんに悲しかつた。われに救ひあれ。みぢんも冗談でなく、そんな大袈裟な言葉を仰向いてこつそり呟いた程である。懷中には、五十圓と少し在つた。

「アンドレア・デル・サルトの、……」

ばかに大きな聲で、突然そんなことを言ひ出した人があるので、笠井さんは、うしろを振りむいた。登山服着た青年が二人、同じ身拵^{みづしら}への少女が三人。いま大聲を發した男は、その一團のリードア格的、ベレ帽をかぶつた美青年である。少し日焼けして、仲々おしやれであるが、下品である。

アンドレア・デル・サルト。その名前を、そつと胸のうちで誦してみても、笠井さんは、どぎまぎした。何も、浮んで來ないのだ。忘れてゐる。いつか、いつだつたか、その名を、仲間と共に一晩言つて、なんだか議論をしたやうな、それは遠い昔のことだつたやうに思はれるけれども、たしかに、あれは問題の人だつたやうな氣がするのだが、いまは、なんにもわからない。記憶が、よみがへつて來ないのだ。ひどいと思つた。こんなにも、綺麗さっぱり忘れてしまふものなのか。あきれたのである。アンドレア・デル・サルト。思ひ出せない。それは、一體、どんな人です。わからない。笠井さんは、いつか、いつだつたか、その人に就いて、たしかに隨筆書いたことだつてあるの

だ。忘れてゐる。思ひ出せない。ブラウニング。——ミユツセ。——なんとかして、記憶の蔓をたどつていつて、その人の肖像に行きつき、あッ、さうか、あれか、と腹に落ち込ませたく、身悶えをして努めるのだが、だめである。その人が、どこの國の人で、いつごろの人か、そんなことは、いまは思ひ出せなくていいんだ。いつか、むかし、あのとき、その人に寄せた共感を、ただそれだけを、いま實感として、ちらと再び掴みたい。けれども、それは、いかにしても、だめであつた。浦島太郎。ふつと氣がついたときには、白髪の老人になつてゐた。遠い。アンドレア・デル・サルトとは、再び相見ることとは無い。もう地平線のかたに去つてゐる。雲煙模糊である。

「アンリ・ベックの、……」背後の青年が、また言つた。笠井さんは、それを聞き、ふたたび顔を赤らめた。わからないのである。アンリ・ベック。誰だつたかなあ。たしかに笠井さんは、その名を、嘗つて口にし、また書きしたためたこともあつたやうな氣がするのである。わからぬ。ポルト・リツシュ。ジエラルディ。ちがふ、ちがふ。アンリ・ベック。……どんな男だつたかなあ。小説家かい？ 畫家ぢやないか。ヴェラスケス。ちがふ。ヴェラスケスつて、なんだい。突拍子もないぢやないか。そんなひと、あるのかい？ 畫家さ。ほんたうかい？ なんだか、全部、心細くなつて來た。アンリ・ベック。はてな？ わからない。エレンブルグとちがふか。冗談ぢやない。アレクセーフ。露西亞人ぢやないよ。とんでもない。ネルヴァル。ケラア。シュトルム。メレディス。なにを言つてゐるのだ。あッ、さうだ、デュルフェ。ちがふね。デュルフェつて、誰だい？

何も、わからない。滅茶苦茶に、それこそ七花八裂である。いろんな名前が、なんの聯關もなく、ひよいひよい胸に浮んで、亂れて、泳ぎ、けれども笠井さんには、そのたくさんの名前の實體を一つとして、鮮明に思ひ出すことができず、いまは、アンドレア・デル・サルトと、アンリ・ベックの二つの名前の騒ぎではない。何もわからない。口をついて出る、むかしの教師の名前、こと

ごとくが、匂ひも味も色彩もなく、笠井さんは、ただ、聞いたやうな名前だなあ、誰だったかなあ、を、ぼんやり繰りかへしてゐる始末であつた。一體あなたは、この二、三年、何をしてゐたのだ。生きてゐました。それは、わかつてゐる。いいえ、それだけで精一ぱいだったのです。生活のことは、少し覺えました。日々の營みの努力は、ひんまがつた釘を、まつすぐに撓め直さうとする努力に、全く似てゐます。何せ小さい釘のことであるから、ちからの容れどころが無く、それでも曲つた釘を、まつすぐに直すのには、ずるぶん強い壓力が必要なので、傍目には、ちつとも派手でないけれども、もそもそ、満面に朱をそいで、いきんでゐました。さうして笠井さんは、自分ながら、

どうも、甚だ結構でないと思はれるやうな小説を、どんどん書いて、全く文學を忘れてしまつた。呆けてしまつた。ときどき、こつそり、チェホフだけを讀んでゐた。その、くつきり曲つた鐵釘が、

少しづつ、少しづつ、まつすぐに成りかけて、借金もそろそろ減つて來たころ、どうにでもなれ！

笠井さんは、それまでの不斷の地味な努力を、泣きべそかいて放擲し、もの狂ほしく家を飛び出し、いのちを賭して旅に出た。もう、いやだ。忍ぶことにも限度が在る。とても、この上、忍べなかつた。笠井さんは、だめな男である。

「やあ、八が獄だ。やつがたけた。」

うしろの一團から、れいの大きい聲が起つて、

「すげえなあ。」

「莊嚴ね。」と、その一團の青年、少女、口々に、駒が獄の威容を賞讃した。

八が獄ではないのである。駒が獄であつた。笠井さんは、少し救はれた。アンリ・ベックを知らなくても、アンドレア・デル・サルトを思ひ出せなくつても、笠井さんは、あの三角に尖つた銀色の、さうしていま夕日を受けてバラ色に光つてゐるあの山の名前だけは、知つてゐる。あれは、駒

が獄である。斷じて八が獄では、ない。わびしい無智な誇りではあつたが、けれども笠井さんは、やはりほのかな優越感を覺えて、少しほつとした。教へてやらうか、と鳥渡、腰を浮かしかけたが、いやいやと自制した。ひよつとしたら、あの一團は、雜誌社か新聞社の人たちかも知れない。談話の内容が、どうも文學に無關心の者のそれでは無い。劇團關係の人たちかも知れない。あるひは、高級な讀者かも知れない。いづれにもせよ、笠井さんの名前ぐらゐは、知つてゐさうな人たちである。そんな人たちのところへ、のこのこ出かけて行くのは、なんだか自分のろくでもない名前を賣りつけるやうで、面白くない。輕蔑されるにちがひない。慎しまなければ、ならぬ。笠井さんは、溜息ついて、また窓外の駒が獄を見上げた。やつぱり、なんだかいまいましい。ちえつ、ざまを見ろ。アンリ・ベツクだの、アンドレア・デル・サルトだの、生意氣なこと言つてゐても、駒が獄を見て、やあ八が獄だ、莊嚴ねなんて言つてやがる。八が獄は、ね、もつと信濃へはひつてから、この反對側のはうに見えるのです。笑はれますよ。これは、駒が獄。別名、甲斐駒。海拔二千九百六十六米。どんなもんだい、と胸の奥で、こつそりタンカに似たものを呟いてみるのだが、どうも、われながら、榮^はえない。俗っぽく、貧しく、みぢんも文學的な高尚さが無い。變つたなあ、としんから笠井さんは、苦笑した。笠井さんだつて、五、六年まへまでは、新しい作風を持つてゐる作家として、二、三の先輩の支持を受け、讀者も、笠井さんを反逆的な、ハイカラな作家として喝采したものののであるが、いまは、めつきり、だめになつた。そんな冒險の、ハイカラな作風など、どうにも氣はづかしくて、いやになつた。一向に、氣が跳^はまないものである。さうして頗る、非良心的な、その場限りの作品を、だらだら書いて、枚數の駄けひきばかりして生きて來た。藝術の上の良心なんて、結局は、虚榮の別名さ。淺墓な、つめたい、むごい、エゴイズムさ。生活のための仕事にだけ、愛情があるのだ。陋巷の、つつましく、なつかしい愛情があるのだ。そんな申しわけを呟

きながら、笠井さんは、ずるぶん亂暴な、でたらめな作品を、眼をつぶつて書き殴つては、發表した。生活への殉愛である、といふ。けれども、このごろ、いや、さうでないぞ。あなたは、結局、低劣になつたのだぞ。ずるいのだぞ。そんな風の囁きが、ひそひそ耳に忍びこんで來て、笠井さんは、ぎゅつとまじめになつてしまった。藝術の尊嚴、自我への忠誠、そのやうな言葉の苛烈が、少しづつ、少しづつ思ひ出されて、これは一體、どうしたことか。一口で、言へるのではないか。笠井さんは、昨今、通俗にさへ行きづまつてゐるのである。

汽車は、のろのろ歩いてゐる。山の、のぼりにかかつたのである。汽車から降りて、走つたはうが、早いやうにも思はれた。實に、のろい。そろそろ八が嶽の全客が、列車の北側に、八つの峯をずらりとならべて、あらはれる。笠井さんは、瞳をかがやかしてそれを見上げる。やはり、よい山である。もはや日没ちかく、殘光を浴びて山の峯々が幽かに明るく、線の起伏も、こだはらずゆつたり流れて、人生的にやさしく、富士山の、人も無げなる秀拔と較べて、相まさること數倍である、と笠井さんは考へた。二千八百九十九米。笠井さんはこのごろ、山の高さや、都會の人口や、鯛の値段などを、へんに氣にするやうになつて、さうして、よくまた記憶してゐる。もとは、笠井さんも、そのやうな調査の記録を、寫實の數字を、極端に輕蔑して、花の名、鳥の名、樹木の名をさへ俗事と見なして、てんで無關心、うはのそらで、謂はば、ひたすらにプラトニックであつて、よろづに疎いおのれの姿をひそかに愛し、高尚なことではないかとさへ考へ、甘い誇りにひたつてゐたものであるが、このごろ、まるで變つてしまつた。食卓にのぼる魚の値段を、いちいち妻に問ひただし、新聞の政治欄を、むさぼる如く讀み、支那の地圖をひろげては、何やら仔細らしく檢討し、ひとり首肯き、また庭にトマトを植ゑ、朝顔の鉢をいぢり、さらに百花譜、動物圖鑑、日本地理風俗大系などを、ひまひまに開いてみては、路傍の草花の名、庭に來て遊んでゐる小鳥の名、さては日

本の名所舊蹟を、なんの意味も無く調べてみては、したり顔して、すましてゐる。なんの放埒もなくなつた。勇氣も無い。たしかに、疑ひもなく、これは耄碌の姿でないか。ご隠居の老爺、それと異なるところが無い。

さうして、いまも、笠井さんは八が嶽の威容を、ただ、うつとりと眺めてゐる。ああ、いい山だなあと、背を丸め、顎を突き出し、悲しさうに眉をひそめて、見とれてゐる。あはれな姿である。その眼前の、凡庸な風景に、おめぐみ下さい、とつくづく祈つてゐる姿である。蟹に、似てゐた。四、五年まへまでの笠井さんは、決してこんな人ではなかつたのである。すべての自然の風景を、理智に依つて遮斷し、取捨し、いささかも、それに溺れることなく、謂はば「既成概念的」な情緒を、薔薇を、すみれを、蟲の聲を、風を、にやりと薄笑ひして敬遠し、もつぱら、「我は人なり、人間の事とし聞けば、善きも悪しきも他所事とは思はれず、そぞろに我が心を躍らしむ。」とばかりに、人の心の奥底を、ただそれだけを相手に、鈍刀ながらも獅子奮迅した、とかいふ話であるが、いまは、まるで、だめである。呆然としてゐる。

——山よりほかに、……

なぞといふ大時代的ななばかな感慨にふけつて、かすかに涙ぐんだりなんかして、ひどく、だらしない。しばらく、口あいて八が嶽を見上げてゐて、そのうちに笠井さんも、どうやら自身のだらけ加減に氣がついた様子で、獨りで、くるしく笑ひ出した。がりがり後頭部を掻きながら、なんたることだ、日頃の重苦しさを、一舉に雲散霧消させたくて、何か悪事を、死ぬほど強烈なロマンチズムを、と喘へぎつつ、あこがれ求めて旅に出た。山を見に來たのでは、あるまい。ばかばかしい。とんだロマンスだ。

がやがや、うしろの青年少女の一團が、立ち上つて下車の仕度をはじめ、富士見驛で降りてしま